

やがて
僕らの
青春は
終わる
宇宙が
鳴り

三田誠広

やがて笛が鳴り、
僕らの
青春は終わる

三田誠広



やがて笛が鳴り、
僕らの青春は終わる

昭和五十五年八月三十日 初版発行
昭和五十五年十一月十五日 四版発行

著者 三田 誠 広

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角^{かど}川^{かわ}書^{しょ}店^{てん}

東京都千代田区富士見二の十三
①〇二②東京三一一九五二〇八
電話 東京(三五) 七二二 へ大代表

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

やがて笛が鳴り、僕らの青春は終わる

「ラグビーのボールって、どうして楕円形なの？」
といつか君は尋ねた。

「さあてね——」

と僕は言った。そんなこと、知るもんか。楕円形のボールが好きで、ラグビーを始めたわけじゃない。明日から丸いボールでやれと言われたら、やってもいい。もつとも、ブレイスキックがうまくできるかどうか、自信はないけれども。

でも、ちょっと思いついて、こんなふうに答えた。

「どっちへ転ぶかわからないからね。まあ、意外性があるわけだね」

「どうして意外性があった方がいいの？」

「だって、面白いじゃないか」

「そうかしら。どっちへ転ぶかわからないってことがそんなに面白い？ あたし、ちっとも面白くないわ」

そう言って君は、不満そうに口を尖らせた。君はいつも、怒ってばかりいる。怒っている時の、

かげりをはらんだ君の目が、僕は好きだったけれど、君の意見には、賛成できなかった。

だって、そうじゃないか？ 結果がわかつているなら、ゲームをやる必要なんかない。実力に開きがあっても、楕円形のボールがうまいぐあいに転がり、拾いもののトライチャンスが生まれるかもしれない。そんな一瞬を期待して、試合終了の笛が鳴るまで、僕は闘いをやめない。けれども、女と議論するのは嫌いだ。ことにラグビーの面白さは、大空から鳥のように舞いおりてくるハイパントのボールを、走りながら両腕でかく抱きしめてみなければ、わかりっこない。

だから、僕はそれ以上、説明はしなかったし、君も、何か言いたそうに僕の顔を見つめながら、結局そのまま、口をとぎしてしまった。

あの時、君は、何を言いたかったのだろう——。いまなら、少しは、君の胸のうちが、わかるような気がする。

人生は、ゲームではない。人生の闘いには、僕らがゲームの中で感じる、あのすがすがしさがない。だからこそ、そこでは、意外性などというものに、価値をもたせることはできないのだ。

「どっちへ転ぶかわからないってことがそんなに面白い？」

と、とがめるような口調で君が言おうとしたのは、きっとそのことなのだろう。一つの体験が、僕の考えに変化をもたらしした。君の意見に、いま、僕は同意する。

どっちへ転ぶかわからない——それは、君の心だ。そうして、たしかにそれは、ちっとも面白いことじゃない。

一九七五年の夏の終わり、僕らは東京の西のはずれにある、ラグビー部の専用グラウンドで、夏期トレーニングの仕上げにかかっていた。

ニュージーランド留学のために、軽井沢かろいざわの合宿に参加できなかった、僕らのチームのエース、右センターの阿木三郎が、この日から、チームに加わっていた。

「アウ、アウ、アウ、ハー、ハイッ！」

三郎は、走りながら、わけのわからない掛け声をかける点を除けば、いたって元気で、真冬の国から、このクソ暑い日本にいきなり戻ってきたとは、とても思えなかった。

「おい、サブ、その、アウアウアウってのは、何だい？」

フォワードがラインアウトで並んでいるすきに、僕は三郎に尋ねた。

「知らないのか。ウォー・クライだよ。マオリ族の戦いの踊りさ」

「わかった。ニュージーランド・チームが、試合の前にやるやつだな」

「そうさ。むこうでは、オレもやったんだ」

「それはいいけどさ、試合中にやるのはやめてくれよ。何だか、調子が狂っちゃうよ」

左のタッチからボールが投げこまれ、モールから、こちらに球が出た。僕らは走りはじめた。スクラムハーフの福多が、ダイビングしながらパスを送る。スタンドオフの近藤は、球離れが遅いと合宿でOBにしごかれたせいとか、ほとんど間をおかずにパスを出す。自分をマークしている敵のセンターを十分にひきつけておいてから、僕は三郎をとばして、右ウィングの佐伯に長いパスを出した。敵は二人がかりで三郎をマークしていたので、佐伯はノーマークで右タッチライン沿いに走り、追いつがるフルバックを快足でふりきって、トライを決めた。

「おいおい、いまのは何だよ」

ブレースキックのために球を受けとりながら、三郎がささやいた。僕はとぼけて言った。

「たまにはウィングにも、球を回してやらなきゃ」

「ちえっ、オレは、練習のために帰ってきたんだぜ。もうちょっとで、ブロンドをくどきおとせそうだったのにさ。これ、お前、蹴るか？」

「蹴らしてやるよ、練習だから」

「ふんッ。お前、少しはうまくなったのか。オレがケガでもしたら、どうするんだ」

「お前の身体からだは、こわれやしないよ」

タッチラインのすぐわきの、難しいキックだった。地面に立てたボールを、三歩ほど助走をつ

けて、三郎は無造作に蹴った。身体を弓のようにしなわせた、変則的なインサイドステップキックだが、球はグリーンと伸びて、クロスバーの上を高々と越えていった。

ほオッ、という溜め息が、タッチ扱いに見物していたOBたちの間からもれた。留学帰りのスパースターの初練習とあって、やたらと見物人がつめかけていた。

「阿木、いちだんと力がついたな」

この練習試合のレフリーをやっている志賀コーチが、笛を吹くのも忘れて言った。僕らのチームでは、プレースキックでゴールを狙う場合、短い距離はオーソドックスな蹴り方をする僕、長い距離はインサイドステップの三郎、というふうに、分担が決まっていた。

「少しフォームが変わったな。ニュージールランド仕込みか」

キックオフの布陣に戻りながら、僕は言った。三郎はいかにも気分がよさそうに、ワッハッハ、と豪傑のような笑い方をした。もともと、この男は、いつだって調子がいい。初めて会ったのが七歳の時だから、もう十五年のつきあいになるけれども、三郎が陰気にうち沈んでいるところなんて、見たことがない。

「ナシヨナル・チームのフルバックをやってる、ジョージ・クラークから習ったんだ」

「習った？ お前、英語できるようになったのか」

「そりゃア、半年いりゃ、少しはわかるようになるさ。だいたい、球の蹴り方なんて、言葉で

教わるもんじゃない。見てりゃわかるよ。それより、さっきのは何だよ」

「え？」

「どうしてオレをとばすんだ」

「何だ、まだ言ってるのか、しつこいな」

「今日の見物人は、みんなオレを見に集まってるんだぜ」

「お前、ひとりでラグビーやるつもりか」

「ただの練習試合なんだから、とにかくオレにボールを渡せばいいんだ」

「どこのチームだって、二人がかりでお前をマークするぜ」

「馬鹿野郎、だから言ってるんだ。こっちの手の内を、見物人の前で見せることはないんだ」
めずらしくきびしい口調で、三郎は言った。僕が黙っていると、三郎は僕の耳もとに口を寄せ
るようにして、ささやいた。

「オレたちの、最後のシーズンじゃないか。オレはな、何としても優勝したいんだ」

「お前、本気か」

と僕は言った。僕らのチームの去年の成績ときたら、Aリーグよりもはるかにレベルが低いとい
われているBリーグで、五勝四敗、十チーム中の六位なのだから、いくらニュージランド仕
込みのスーパースターがいるからといって、一気に優勝なんてのは、無理に決まっている。

いや、僕だって、まったく野心がないわけではない。五勝四敗とはいえ、そのうちの一勝は、優勝候補の一角だった（結果は三位だった）加洋大学をやぶったものだ。四位の奈良学院にも勝っている。ビリから二番の奥山大学に負けた手痛いとりこぼしがなければ、Aリーグとの交流試合に出場できていたはずだった。

だが、全勝優勝した智理大学には、まったく歯がたたなかった。フォワードに新人が入り、ハーフの二年生コンビが成長しているとはいえ、二位になるのがいいところだろう。それに、たとえBリーグで優勝したところで、仁保大学、辺東大学という強豪がひしめくAリーグの壁は厚い。

「智理大学のフォワードは、去年のメンバーより重いんだぜ。かないっこないよ」

僕がそう言うのと、三郎はかろやかな笑い声をあげた。

「智理なんか問題じゃないさ。オレは全国大会の優勝を狙ってるんだ」

「全国大会か——。そうだな、せめてベスト4まで行ければな」

優勝はできなくても、Bリーグで二位になれば、交流試合ではAリーグの三位と対戦することになる。もしそれに勝つことができれば、次の相手は地方リーグの代表だから、準決勝進出はまちがいない。ただし、そこで、Aリーグの二大強豪のどちらかと当たることになる。

「ベスト4なんてケチくさいことを言うな。仁保にも辺東にも勝つんだ」

僕の胸算用をよそに、三郎は、こともなげに言っただけだ。

キックオフのボールが、高く舞い上がった。両軍のフォワードが激しくぶつかりあい、ラックから、こちら側に球が転がり出た。スクラムハーフの福多からスタンドオフの近藤へ、近藤はその球を蹴って、ハイバントを上げた。だが、少し強すぎたようで、ボールはタッチラインの外に落ちた。

「おい、近藤」

ダイレクトタッチは、蹴った地点にボールが戻される。指を鳴らしながらラインアウトの後方に返ろうとしている近藤を、三郎が呼びとめた。

「どうして蹴るんだよ。オープンに回さなきゃ駄目じゃないか」

「すいません」

二年生の近藤は、ぴょこんと頭を下げた。

「いちいちうるさく言うなよ」

と僕は口をはさんだ。軽井沢の合宿で、近藤がひそかに、ハイバントやドロップゴールの練習にうちこんでいたのを知っていたからだ。もともとキックの得意な選手で、高校時代から際立った動きをしていた。そいつをテレビで見えて、三郎自身が、スカウトに行け、とコーチに命じ

たほどだ。だが、スタンドオフがキックを多用したり、自分でサイド攻撃を仕掛けたりすると、それだけ、三郎の活躍するチャンスが減ることになる。

「お、何だ何だ」

三郎は、つかかるようなものの言い方をした。

「キャプテンだからって大きな顔するなよ。オレが留学するから、お前を代役にしただけなんだから」

「まあ、いいけどさ……」

と僕は言葉をにがした。帰国後の初練習とあって、三郎はいくらか昂奮ちやうはんしていた。もともとスター気取りで、自分勝手な人間だったが、留学したことで、ますます手がつけられなくなっている。ラインアウトの球が、またこちら側に出た。福多から近藤へ。近藤は、今度は素直に、僕にボールを渡した。僕もめんどくさくなったので、どうとでもなれという気持で、ほとんど前進しないまま三郎にパスした。

タイミングが早すぎたので、僕をマークしていた敵のセンターが、苦もなく三郎の方へ寄っていく。そのむこうにもうひとりのセンター。さらに敵のフランカーが、その後方に回りこんでいる。三人がかりで三郎をおさえようというわけだが、三郎はひよいひよいとステップをふんで、あつというまに三人をかわし、そのむこうにいたフルバックも、鮮やかなフライントモーション

で一気に抜いて、そのまま無人のグラウンドを、ゴールポストの真中に向かってゆうゆうと独走していく。

「ちえっ、これじゃあ試合にならないなア」

タックルしそくなって地面にひっくりかえっていた右フランカーの松原が、ねっころがったままふてくされたようにつぶやいた。

「お前がだらしないからだよ」

と僕は言った。けれども確かに、これではゲームにならなかった。レギュラーのフォワードと二軍のバックス、二軍のフォワードとレギュラーのバックス、という組み合わせで、紅白戦をやっているのだが、もともと僕らのチームは、フォワードが弱く、それを阿木三郎ひとりでもたせているようなもの（フルバックの木元も時々ピンチを救ってくれるが）だから、フォワードをとりにかえても、あまり意味がないのだ。

「ほい、お前が蹴る番だぜ」

ボールをもって、三郎が駆け寄ってきた。自分ひとりでもいいところをみせたので、すっかり上機嫌だ。

「何だい、これもお前が蹴ればいいじゃないか」

勝手なことばかりやっている三郎に、皮肉のつもりでそう言ったのだが、こいつには、皮肉な

んてものは通じない。無邪気な顔つきで――

「冗談言うな。こんなイージーなゴールを失敗してみろ。オレの人氣がガタ落ちになっちゃう」

そう言って三郎は、ボールを手渡した。三郎のインサイドステップキックは、距離は抜群に伸びるのだが、時々蹴りそこなうことがあった。だから、入れば儲けものというロングキックがみごとに決まることもあれば、ゴール正面のイージーキックをミスすることもあった（だから近距離のキックは全部僕に蹴らせる）。一方、僕のキックは、距離はまったく出ないかわりに、コントロールがいいのが取柄だった。

踵で地面に穴をあけ、ボールをまっすぐに立てる。慎重に狙いを定め、一つ大きく深呼吸してから、足を踏み出す。ボールは狙いどおり、まっすぐに舞いあがり、二本のポストのまん中をゆっくりと通り過ぎる。

バラバラと、まばらな拍手。

「あいかわらずだな、お前のは。ボールを蹴るっていうより、撫でるって感じだ」

三郎がぶつぶつ呟いている。

「文句があるんなら自分で蹴れよ」

「お前のコントロールにや、かなわないよ。だけど何だか、ボールをおだてて、飛んでもらっ

てるって感じでさア。それじゃあ、距離が出ないぜ」

「長いのは、お前が蹴るんだろ」

「オレがスランプになるとかさ」

「お前が？ 笑わせるなよ。スランプってのは、デリケートな人間がなるものさ」

「オレは冗談を言ってるんじゃないんだ。試合では、何が起こるかわからん。二重、三重の備えをしておいた方がいい」

「それなら木元がいる。だいたいプレースキックってのは、フルバックが蹴るもんだ。近藤だって、やらせれば、けっこう長いのを蹴るんじゃないかな」

「オレは、お前のことを言ってるんだ。お前は、やり方ひとつで、もっと距離が出せるはずなんだ」

「どうやればいいんだい？」

「つまり、本気で蹴るんだよ」

僕は、思わず、声をあげて笑ってしまった。

「何だよ、オレが、本気で蹴ってないっていうのか」

「そうだよ。お前はいつだって、かげんしながら蹴ってるんだ」

怒ったような強い調子で、三郎は言った。僕は何か言い返そうとして、三郎の顔を睨んでみた